御狐様のIS日和

あいあむウィーゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
御狐様のＩＳ日和

【Ｎコード】
Ｎ７２９３Ｙ

【作者名】
あいあむウィーゼル

【あらすじ】
女性にしか動かせないパワードスーツ「インフィニット・ストラトス」、通称ＩＳ。そんな中で世界初の男性ＩＳ操縦者、織斑一夏が発見されたというニュースに世界が揺れる中、女神達の学舎に１人の少年が現れる。彼の名は神崎玖楼。『世界最強』の高校教師であった……。これは『魔法先生ネギま！　御狐様が見てる』の逆転作品です。ついでに言うと、これは作者が書きたいと思った自己満足要素が詰まっておりますので、タグを見て「無理だ」と判断された方はお帰りください。

第1話：新世代型“疑似”子供先生、ここに復活（前書き）

えー、前置きもなくやっちまいました。
「御狐様」のＩＳ版。つまり、逆転版です。
御狐様ではネギまを舞台にしていましたが、こっちでは逆です。ＩＳを舞台に頑張って貰います。

玖楼のイメージはあっちと同じですが、その最強さがパワーアップしております。
ちなみに、私がイメージする最強教師は「等身大の光の巨人」と称されるあの人です。あそこまで何もかも力尽くでぶっ飛ばしはしませんが、それくらい強いのでご注意を。

第1話：新世代型“疑似”子供先生、ここに復活

やぁ、ボクは神崎玖楼。ごく普通の専業主夫だ。

「そなたを『普通』と形容すれば、間違いなく常識が破綻するじゃろうな」

うっさい、そこ黙れ。

ソファに寝転んだままの妻、瑪瑙にそうツッコみつつも、手を休めない。

ちなみに、今日のご飯は鶏ムネ肉の竜田揚げ。

ムネ肉は安いんだけど、パサついて美味しくない。そこで調理の前にサラダ油につけ込んでおくのがポイントだ。こうする事でパサつきが無くなる。

醤油とお酒、それから擦ったにんにくを合わせたタレで下味を付け、小麦粉をまぶしてカラッと揚げる。

「ほら、出来たよ」

「うむ」

瑪瑙が立ち上がると、椅子に座る。

ボクも出来上がったばかりのご飯をテーブルに並べ、同じく椅子につく。

「ところで玖楼。就職するというのは本当か？」

「耳が早いね」

就職というよりも、復職に近いかな。

数年前まで教職に就いていたボクだけども、数年前のとある事件で怪我をして以来、療養中。

怪我自体はもう癒えているから、復帰しようと思えばいつでも復帰出来るわけだけど。

もちろん年単位で遠ざかる事は分かっていたから、前の職場には自主退職という形で辞めた事になっている。

「最初は断ろうと思ったんだけど、内容が内容だからね。それに轡木さん直々に頼まれちゃったし」

「……轡木じゃと？」

「そ、轡木十蔵さん」

ＩＳ学園の学園長……もちろん、表向きの学園長は轡木さんの奥さんが務めている。

普段は気のいい用務員として表に立っているから、本当は彼が学園のトップにいる事を知っているのは、教員や関係者ぐらいって事だ。

で、その轡木さんがこの前訪ねてきたんだけど……。

「復職、ですか？」

目の前の男性、轡木さんから持ちかけられた話に、思わず尋ね返してしまう。

「ええ。お願い出来ませんかね」

「……しかし、何で自分なんですか？　言っちゃなんですけど、ＩＳ学園でしょう？　だったらＩＳに携わる人間……うちの妻のような人間がいいはずです」

……正直に言うとだけど、瑪瑙は絶対人に物を教える立場には向かない。

ボクは確かにＩＳの知識は多少あるけども、実際にＩＳに乗れるわけではない。

だから教えられる事と言えば、普通の中学で教えてるようなカリキュラムぐらいで……。

「だからこそ、ですよ。……ＩＳ学園はＩＳ操縦者を育成するための教育機関です。教育内容もＩＳに関連する事に偏ってしまいます」

「……まぁ、それでちょっと前に叩かれてましたしね」

基礎学力の低下。ＩＳ学園に関する事だけでなく、全国的にも問題となっている。

特にＩＳ学園は今、轡木さんが言った通りに教育内容が偏っているために、普通校と比べて基礎学力の平均が低い。

でも、その事にしたってわざわざこうやって主夫してるボクを引っ張り出さなくても、そっち方面でやり取りして普通教師を回してもらえばいいはず。

「……要するに、それだけじゃないって事ですか？」

「相変わらず、察しがいいですね」

「いえいえ」

にこやかに応対しつつ、轡木さんは何かのファイルを取り出した。

どうやらこれを読んで欲しいらしい。受け取ると、それに挟まれていた書類に目を通す。……あれ、この子って。

「織斑一夏……織斑千冬君の弟さん、ですよね？」

「おや、ご存じでしたか」

「元教え子の家族くらい憶えてますよ。それに彼女はちょっと特殊でしたから」

織斑千冬の名を知らぬ者は、この世界でも少ないだろう。

ＩＳの国際大会『モンド・グロッソ』。その第１回大会で、たった１本の剣を手に、世界の頂点へと上り詰めた少女の名前だ。

世界最強（ブリュンヒルデ）とまで呼ばれた彼女だったが、３年前の第２回大会、個人競技の決勝戦を突然放棄。その後、現役から引退したと聞いている。

実を言うと、ボクは彼女の中学時代の担任だったのだよ。驚いた？

「しかし、どうして一夏君が出てくるんです？」

「先日、ＩＳ学園の入学試験が行われました。その場で彼は試験用に運び込まれていた機体を起動させたのです」

「……すみません。もう１度いいですか？」

「織斑一夏君は、世界で初めて発見された男性ＩＳ操縦者、というわけです」

……おぉぅ。もう読めた。

内心ため息を吐きつつも、もう１つの仕事について口にする。

「護衛ですか」

世界初の男性ＩＳ操縦者となれば、世界中からの注目を浴びる。

そうなれば、今後の彼の生活が脅かされる。どっかの研究機関に送られてホルマリン漬けか、モルモット扱いか（まぁ、そんな事した

ら織斑君（姉）の怒りを買うだろうから、表立って動いたりは出来ないと思うけども）。

少なくとも、今までの通りの平穏な生活は出来なくなる。そのための救済策がＩＳ学園行きというわけか。

「本当なら、生徒に潜り込ませる事が出来ればよかったのですが……」

「思春期の男子には辛いところがあるでしょうね」

同年代の女生徒に囲まれ、冷や汗を流す彼の姿。

リアルにそれが想像出来てしまい、思わず苦笑してしまう。

世の男性方からすれば、リアルでハーレム状態なので羨ましいにも程があるだろう（女子校の実態なんてそんなもんじゃないけど）。

それでさらに女生徒を側に置くというのは問題がありすぎる。主に彼の精神面について。

「それで自分に白羽の矢が立ったわけですね？」

「ええ。腕の立つ人物で、尚かつＩＳ学園に入る事の出来る男性……該当するのは君くらいでしたから」

そりゃあね、昔っからちょっと荒っぽい事とは縁があったから、腕には自信がある。

……でも、それだったら轡木さんがやればいいじゃないですか。

「いえ、私も年ですからね。さすがに昔と比べると思うように身体が動かないわけですよ」

年は取りたくないものですね～、と言いつつもお茶をすする轡木さん。

嘘つけ、と言いたくなったけども、お茶と一緒にそれを呑み込む。

画面の向こうのみんな、考えた事は無いかな？　どうしてこの人が、護衛も付けずにボクの家にまで1人でやってきたのか。

確かに、この人が実質的なＩＳ学園の経営者だという事を知っている人間は限られる。でも、知っている人は知っている。当然、狙われたりする可能性だってある。

それなのに何故、護衛を付けないのか。その答えはシンプルイズベスト。「必要無い」からだ。

たかが暗殺者の1人や2人、この人なら……轡木十蔵なら、赤子の手を捻るようにのしてしまうだろう。

「まぁ、それはさておき、どうでしょうか？」

……復職する事自体はそこまで問題じゃない。

今のボクはあくまで専業主夫だし、復職出来ないという状況ではない。

でも、復職せずともいい。実際、瑪瑙は高給取りだから生活には困っていないから。

要するに、「どちらを選ぶにしても問題は無い」のだ。

（……でも）

実はまだ、引っかかっているところがある。

織斑一夏君がＩＳ学園の入試会場にて、ＩＳを動かしたという事実。

資料によると、同日に藍越学園の入試も行われており、どうやら彼はそっちを受験するはずだったようだ。

単に会場を間違えて、それでたまたまＩＳが設置されていた部屋に迷い込み、たまたまＩＳに触れてしまった事が発端。そう考えれば楽だけど、そこまで偶然が重なるものなのか。

そもそも、ＩＳ学園の受験者は女性だけ。同年代の男性がいたら、受験者なりスタッフなり誰かが「会場間違えてますよ」と声をかけるはず。それにＩＳが保管されているとなれば、警備だって整って

いる。１５歳の少年が近づけば、誰だって不審に思う。

そしてＩＳを起動させたのがミソだ。たまたま動かせる“何か”があったとも考えられるが、他にも『誰かが細工していた』とも考えられる。

これらの状況を作る事が出来る存在に、ボクはたった１人だけ心当たりがあった。

「……分かりました。その話、お引き受けします」

「……なるほど、あのウサギか」

竜田揚げを口へと運びながら、そう呟く瑪瑙。

彼女がウサギと形容する相手、それはＩＳの生みの親……篠ノ之束博士の事だ。

ＩＳの中枢とも言える「ＩＳコア」は、今も尚ブラックボックスとされており、完全に解析されていない。

何故、男性には動かせず、女性にのみ動かせるのか。

ＩＳコアにこそ、その謎があるとされているが……真相を知るのは篠ノ之君だけ、というわけだ。

「織斑一夏君の事が全て彼女の仕業かどうかは分からないけど、疑わしいのは事実。……それに」

「それに？」

「……ううん、何でも無い」

まぁ、轡木さんの話を受けたのはその事だけじゃない。

教育者として、やっぱり学力低下問題は見過ごせないってところもあった。

自分１人でどうなるか分からないけど、無為に日常を過ごしてるくらいなら、少しくらい職場復帰してみようと思ったわけだね。

「それに、そろそろ彼の事も隠しきれなくなってくるだろうし……」

委員会からマスコミに圧力をかけているとは言っても、限界がある。

人の口に戸は立てられない。どこか隔絶された場所ならともかく、判明した場所は一般人も踏み入る入試会場。

ボクの私見だと、明日明後日辺りには報道されるんじゃないかな？

どちらにせよ準備自体は整ってるわけだし、抑え込む必要もそろそろ無くなってくるのだから。

「……しかしＩＳ学園となると、そなたは向こうに住み込む事になるじゃろう？」

「まぁ、そうなるかな」

学生寮に住むわけにはいかないし、適当なところにテントでも張ろうかと思ってたけど。

さすがに、家から通うにはちょっと遠すぎる。片道何時間かかると思う？

そんな事を考えていると、突然瑪瑙が悲痛な叫びを上げる。

「妾はこれからどうやって生きてゆけばいいのじゃ！？　誰に食事

の支度してもらえばいい？」

知るか。

……なおその後、どうやら職場に住み着いたらしく、定時連絡の時には上の娘と下の息子の引き攣った顔を見る事となった。

とりあえずごめん。果てしなくごめん。

第1話：新世代型“疑似”子供先生、ここに復活（後書き）

ＩＳ関連で考えてたネタ

1，ＩＳで復讐モノ
主人公が「白騎士事件」で家族を亡くし、復讐を誓うお話。
既に似た話がありますし、書いちゃうと矛盾する部分が出てくる＋よくあるアンチ物になっちゃうかなと思ったので、書くのをやめました。

2，ＩＳ×仮面ライダーＯＯＯ
一夏を映司のポジションに置いて、原作開始の1年か2年前にオーズとして戦っていた過去捏造モノ。
誘拐事件がきっかけで、映司と似た様な「乾いた」状態になり、どことなく千冬ともギクシャクした関係が続いていた中でアンクに遭遇。已む無くオーズに変身して戦う事に。
鴻上ファウンデーションがオーズのシステムを再現したＩＳを開発。
白式でなくそっちに乗る事に。
ヒロインは鈴、もしくは日奈。後に打鉄弐式をバースのシステムで完成させる話を考えてました。
仮面ライダークロスだと需要があるか不明だったので、ネタとして1話だけ書いたものが存在してます。

3，「ＢＡＤ　ＥＮＤ」を練り直した話
誘拐事件がきっかけで、千春の影の人格「千影」が誕生。
千影は「千春を傷つけた」千冬達を嫌うが、千春が抱く千冬達への愛は変わらない。
オリキャラを減らして、束を若干常識人化。束を千春と千影の理解者に。

これはこれで面白いかな～と思ってますけど、やっぱり無理があるかな～と思ってます。

第2話：神崎家の変わらぬ日常（前書き）

神崎家と言っても全員は出てきません。
なお、神崎家の子供達は宝石の名前にちなんでます。……傍から見たら一部ＤＱＮネームかもしれませんが。

第2話：神崎家の変わらぬ日常

「と言うわけで、新学期からＩＳ学園で1年生の一般教養科目を担当する事になりました。神崎玖楼です。よろしく」

その人の姿を見た瞬間、凍ってしまったのは不覚としか言い様が無い。

新学期が始まる前、新任の教師が数名来るというので、その紹介の場に立ち会ったが、まさかこの人がいるとは……。

「や」

唖然としている私に気づいたのか、にこにこしながらそう挨拶してくる神崎先生。

この人は……何1つ変わっていない。全く変わっていないのがある意味怖い。

「……神崎、先生」

「織斑君、久しぶりだね～。中学卒業以来だから……もう8年だっけ？」

「ええ。先生も……その、お変わりないようで」

どうにかその言葉を搾り出す。

「それ褒め言葉として受け取っていいのかな？」

……いえ、他に何を言えと？

だってあなた、あの頃と全く変わって無いじゃないですか。

「あの……神崎先生。織斑先生とお知り合いなんですか？」

と、私の隣にいた山田君が尋ねてくる。

ああ。私の中学時代の恩師……2年と3年の時は担任だった。

「そうなんですか～。……あれ？」

私の言葉を聞いて、山田君が首をかしげる。他の教師陣も何やら微妙な顔になり始める。

……どうやら気づいたらしい。私が何故、「変わっていない」とコメントしたのか。

神崎先生は相変わらずにこにこしている。山田君が代表して、その質問を投げかける。

「つかぬ事をお聞きしますが……」

「うん？」

「神崎先生って、おいくつですか？」

……そう。神崎先生は私が中学生だった頃から容姿が全く変わっていない。

しかも見た目が小柄で童顔なので、中学生ぐらいにしか見えない（山田君も大概だが）ので、中学時代もスーツを着ていなければ同級生に見間違えられたくらいだ。

あの頃、生徒の１人が「先生っていくつなんですか？」と問いかけて、その答えを聞いた時の衝撃は今でも憶えている。

今回、山田君達が憶えるであろう衝撃は、あの頃の私より数倍上である事は間違いない。

「去年が厄年だったから、今年で４３だね。ちなみにこれでも子持ちだよ」

「え」

……その瞬間、凄まじい叫びが響き渡った。

「まぁ、毎回毎回年齢の事でとやかく驚かれてたからね。もう慣れちゃったよ」

にこにこ笑顔を崩さぬまま、神崎先生が私の後ろを歩く。

同じくその隣を歩く山田君もようやくショックから抜け出せたらしく、苦い笑みを浮かべている。

……気持ちは分かる。あの容姿で四十路はあり得ないと言いたい。

それも何か特別な事をしているわけでなく、素であああなのだから、女性教師からしてみれば羨ましい以外の何物でもないだろう。

「それにしても神崎先生。何故再び教師に？」

何年か前の同窓会で聞いた話だと、数年前に教職を引退したという。

その時は神崎先生は出席されていなかったので、当人から話を聞く事は無かったのだが……。

「色々あってね。……まぁ、大きな理由は理事長から頼まれたからなんだけど」

ああ、なるほど。

この学園の理事長は表に出る事はあまり無い。そういった事は奥方に任せ、普段は違った形で生徒達と接している。

そして神崎先生だが……私たちでは想像出来ないほど広く深いツテを持っている。理事長と縁があったと言っても不思議では無い。

「それにしても、君も大分変わったものだね」

「……いえ」

抜き身の刀。

かつて、神崎先生は私をそう例えた。触れるもの全てを切り裂く刀その物だと。

「昔の織斑先生と、そんなに違うんですか？」

「うん。……いや、懐かしいね」

確かに懐かしいけども……私からしてみれば複雑だ。

あの頃の私は、ただ一夏を守る事に必死で、いらぬ敵を作る事もあった。

そんな時にお世話になったのが神崎先生。私の事情を知った上で色々と便宜を図ってくれて……だが、当時の私はそれすらも煩わしく思い、事も在ろうに先生に喧嘩を売った。

……気がつけば、握っていた竹刀は粉々にされ、私は仰向けで倒れていた。

（……今でも、この人には勝てる気がしないな）

「まぁ、それはともかく。これからよろしくお願いします、織斑先生」

そう言って、神崎先生が手を差し出してくる。

少し迷ったが、私はその手を取った。

これからは生徒ではなく、教師として同じ立ち位置で接していく事となる。

……教師の任を勤め上げているかどうか定かではない私が、それをも果たせるか不安だが。

「……あれ？　ここは」

と、神崎先生が立ち止まる。

その部屋からは何かおどろおどろしい空気というか、とにかく悲痛な雰囲気が漂ってきている。

……どうやら、それに気づいて立ち止まったらしい。

「そこは生徒会室ですよ」

「いや、プレート出してあるからそれは分かるんですけど……この悲痛な空気は何」

神崎先生の言葉に、私と山田君は顔を見合わせてしまう。

……あのバカは。まだ立ち直っていなかったのか。

「珊瑚ちゃん、ご飯まだですか～？」

「そうじゃ。まだか？」

「……まだ、すこしまってて」

私と義母様の声に、珊瑚ちゃんがやや苛つきながら答える。

だって～。私は最近忙しくて料理できないし、母様だって料理は壊滅的だし～。珊瑚ちゃんは父様と同じで料理上手でしょ？

「ひていしない」

そう言いながらも、フライパンを振るう手を止めない。

……さてさて、ここで自己紹介させていただきます。

私は神崎家長女、神崎琥珀です。年齢は～……秘密ですが、主に国内のとある研究所で生体関係のお仕事をしてます。

「ちょっと待て。妾の料理が壊滅的とは何じゃ！」

「あは～。母様の料理が美味しかったら、この世の料理全て至高のメニューに掲載されますよ」

「じじつ。おかあさん、りょうりへた」

……あ、何か突き刺さってる。ぐさぐさと聞こえるほど。

ちょっと言い過ぎたかもしれませんね。反省はしています。しかし、後悔はしていません。

今、あそこで哀愁を漂わせてるのが私たち兄妹の母親、神崎瑪瑙。……どう見ても２０代にしか見えませんが、あれでも四十路です。父様と同い年です。４３です。

ああ見えて、母様も私と同じく研究者。分野は違いますが、かなり優秀な方だと言う話です。

そして、今こっちで料理を作ってるのが……。

「りょうりちゅう。はなしかけるな」

神崎家の次男。私たちの末の弟、珊瑚ちゃんです。

容姿と言動こそ幼いですが、兄妹の中では1番の有望株。瑠璃ちゃんと同じか、それ以上の才覚を秘めてるとされています！

……おっと熱弁しすぎてしまいました。

あとは～……そうそう、ここにいない人達の紹介もしないと。

まず私たちの父様、神崎玖楼。母様と同い年で、ちょっと前までは専業主夫だったけど、なんやかんやでＩＳ学園の教師になったとか。

次に長男の紫水。私たちの兄様で、今どこにいるのか1番不明な人。いい人なんですけど、父様に次ぐトラブル体質で、とにかく運が無い。2年か3年ほど前にも事件に巻き込まれて、仕事クビになったって聞いてますし。

そして私の双子の妹！　マイ・スイート・エンジェル翡翠ちゃん！！　今はイギリスのどこかの貴族さんの家でメイドをしてるって聞いてますけど。うう～、もう最後に会ってから1年経つのよ？　たまにはお姉ちゃんに会いに来て欲しいな～。

……うん、ちょっとズレました。次行ってみましょう。

最後になったけども、神崎家三女の瑠璃ちゃん。私たち3人の妹で、

珊瑚ちゃんのお姉ちゃん。今はある意味、父様に1番近い位置にいる。と言うのも……。

（あの子、代表候補生……でしたっけ？　そーゆーのになったって聞いてますし）

この前、嬉しそうに報告していましたから。

国家代表の候補生だから、代表候補生。国の次代を担うＩＳ操縦者に、あの子が選ばれたのは姉としても嬉しいと思う。

けど、それはすなわち、ＩＳ操縦者養成のための教育機関へ進む事が決定された事であり……つまり、あの子はＩＳ学園の生徒になる。

……きっと父様がＩＳ学園の教師になると聞いて、1番喜んでいるに違いない。あの子、父親大好きっ子だから。

この場合、防波堤になるのは母様の役目なんですが……。

「妾……料理下手じゃないもん。玖楼だって『美味しい』って言うてくれたもん……」

……うん、ほっときましょう。

拝啓、本音へ。

友達がファザコン過ぎて困る。何とかして。

「……瑠璃、もうちょっと落ち着いたら？」

「だって～、学校でもパパと会えるんだよ？　楽しみだなぁ～」

我が友人、神崎瑠璃は極めて重度のファザコンである。

女の子なら小さい頃思うであろう「大きくなったらお父さんのお嫁さんになる！」という野望を、１５になった今尚も抱き続けており、虎視眈々と実の父親を狙っている。

最大の敵を実の母親と言ってのけるほど、父親への愛が溢れ出てい

る様を見る度に、正直引く。

それでも友達やめてないのは、やっぱりこの子の事、好きだからだろうな。

（……さすがに度を超えてるのは引くけど）

父親の事を想いながらくねくねしてるのを見ると、やっぱり気持ち悪くなる。

「それより、簪ちゃんはどうなの？　お姉さんとうまく行ってる？」

突然、くねくねするのをやめて真剣な顔でそう問いかけてくる瑠璃に、思わず返答に困る。

私のお姉ちゃん……更識楯無は、ＩＳ学園の生徒会長で現ロシアの国家代表。

何をやらせても１００点満点の超が付くほどの完璧超人。それが周囲からお姉ちゃんに対するイメージ。

そんなお姉ちゃんに私は、どう接していいか分からなかった。

「……お姉ちゃんなんて、どうでもいい」

「もしかして、まだ仲直りしてないの？」

呆れ顔の瑠璃だけど、私にも譲れないものがある。

１ヶ月ほど前、ひょんな事から瑠璃と知り合ってしばらくして、瑠璃がお姉ちゃんに絡まれた。

本音に聞いた話だと、何でも私と仲良くしている女の子がいるとお姉ちゃんが知って、それでちょっかい出しに行ったらしい。

お姉ちゃんの行動が、私を心配してのものだというのは分かる。

でも、だからと言って友達に「消す」とか物騒な単語を言い放つのはやり過ぎだから、私は悪くない。

「あの時のお姉さん、すごい「この世の終わり」みたいな顔してたし、相当落ち込んでるんじゃない？」

「あのお姉ちゃんが落ち込む？　まさか」

あれくらいで傷つくんなら、どんなガラスのハートなんだか。

……なお、私は知らない。

あれから１ヶ月間、私に言われた事が原因でお姉ちゃんが真っ白な状態に陥ったため、ＩＳ学園生徒会の機能が停滞している事を。

その所為で、お姉ちゃんの仕事を全部虚がしてるので（普段から大半押しつけられてるらしいけど）、虚のストレスが凄い事になってる事を。

そんな事を瑠璃経由で知る事になるのは、数日後の事である。

第2話：神崎家の変わらぬ日常（後書き）

よく分かる人物紹介

神崎玖楼：神崎家父。主人公。教師。合法ショタ。
神崎瑪瑙：神崎家母。ヒロイン。科学者。基本的にダメ人間。
神崎紫水：神崎家長男。流浪人。トラブル体質。
神崎琥珀：神崎家長女。科学者。腹黒マッド。
神崎翡翠：神崎家次女。メイド。苦労人。
神崎瑠璃：神崎家三女。代表候補生。重度のファザコン。
神崎珊瑚：神崎家次男。〇学生。天才肌。

うちの楯無さんはシスコンのイメージが強いです。
Ｆａｔｅ風にステータスを考えてみると、こんなスキル持ちです。

シスコン…姉妹に対する愛情度を示すスキル。愛情度によって能力が変化する。

Ａ：姉妹絡みの事柄において、能力が限界以上に上昇するが、その分視野が狭まって空回りしてしまい、（精神的に）自滅する可能性もある。
Ｄ：姉妹絡みの事柄において、能力が多少上昇する。

Ａは琥珀と束、楯無さん。Ｄは一夏です。
ちなみに「姉妹」と「兄弟」に入れ替えたブラコンスキルもあり、その場合の千冬はＡ＋を想定しています。
……ええ、完璧に冗談なので本気で受け取らないでください。

ただ、うちの楯無さんはこんな人です。妹の事で暴走してしまい、
それで失敗する人だと思ってください。

第3話：フラグは建つ時に建つ

「……」

神崎先生が固まった。困った顔で私たちを見てくる。

私も何が言いたいかは分かるんです。ただ……どうしようもないんです、これぱかりは。

生徒会室の前で『中に入ってもいいか』と、神崎先生が私たちに質問した事がきっかけでした。

さすがに、あんな状態の更識さんを見せるのは少し迷ったんですが、そこまで強く断れる話じゃないので、生徒会室の扉を軽く開いてみました。

……いえ、あれから1ヶ月ですし、少しは良くなってると思ったんです。ですが……。

「……会長、仕事してください」

「うぅ……簪ちゃ～ん」

げんなりした様子の布仏さんに、机に突っ伏したまま負のオーラの発生源となっている更識さん。

ああ見えて、この学園の生徒会長です。

普段はカッコいいんですよ？　人望ありますし、ロシア代表ですし、学園最強ですし……。

「最初の1週間は大変だったんです。もう部屋に引きこもって……」

織斑先生が困った顔でそう告げる。ええ、あの頃は大変でした。

調子に乗った新聞部が「学園最強を破ったのは誰だ！？」って号外出してましたし。

事情を知ってるこっちとしてみれば、どう反応をしていいのか分かりませんし。

「何があったんです？」

何でも更識さんが妹さんと喧嘩して、それでショックを受けてこうなったとか。

私たちも詳しく知らないんですけどね。ただ、妹さんを溺愛している反面、あまりうまく行ってなくて、その時のショックが凄まじかったと。

「……その妹って、もしかして更識簪ちゃん？」

「あれ、ご存じなんですか？」

「うちの娘の友達。……そっか、あれが原因か」

腕を組みながら、何やら納得している神崎先生。

えっと、何があったか知ってるんですか？

「いや、僕も聞いただけなんだけど……」

今日、私は倉持技研に来ていた。

と言うのも、私の専用機（になる予定）のトライアルが実施される

ため。

機体の準備が終わるまで時間がかかるので、少し息抜きに飲み物でも買ってこようかと廊下に出ると……。

「神崎瑠璃さんね？」

そう呼びかけられた。

振り向くと、そこには私と同じくらいの歳の女の子が立っていた。

青い髪に服の上からでも分かる抜群のプロポーション……むぅ、ママには及ばないかもだけど、歳の割にはかなり立派なモノをお持ちで……。

はて、この人どこかで……。

「そうですけど、どちら様で？」

見た事ある気がするんだけど、思い出せない。

うーん……直接会ったんじゃなくて、誰かに似てるのかな……？

「はじめまして。更識簪の姉です」

「簪ちゃんのお姉さん……？」

……ああ！　言われてみれば、確かに似てる！

髪質と顔の作りは似てる。でも、雰囲気が違いすぎるので、気づかなかった。

「簪ちゃんがお世話になってるって聞いて、それで挨拶したくて」

「あ、ご丁寧にどうも」

何故だろう。にこにこ笑顔浮かべてるけど、この人からは敵意のようなものが感じられる。

よくよく考えてみると、これまで簪ちゃんからお姉さんの事、聞いた事なかったような……。

「ちょっと質問いいかしら？」

「なんですか？」

「“陰陽”の神崎家が、簪ちゃんにどんな目的があるのかしら？」

固まった。

「……何でそれを」

「あら？　質問しているのは私の方だけど？」

今尚もにこにこ笑顔だけど……何でだろう。この人の雰囲気、どこかで感じた気がする。すごく身近なところで。

確信した。この人は私たちの『神崎』の一族の事を知っている。

本当の目的は……神崎の一族が何故、簪ちゃんに近づいたのか調べるため、私に接触した。

……とは言われても、ねぇ。

「いや、どんな目的って言われても、簪ちゃんと友達になったのは偶然なんですけど」

うん、これは本当だし。

私がＩＳ関連の道に進んだきっかけはアスナお姉さんだし、簪ちゃんと友達になったきっかけも、機体設定で悩んでたら通りがかりの簪ちゃんがアドバイスしてくれたから。

だから、このお姉さんが心配するような事は何１つ無いと言っていい。

「……本当に？」

笑顔を消して、訝しむような顔で私を覗き込んでくるお姉さん。

……あ、分かった。この人、翡翠姉さんが家に友達連れてきた時の琥珀姉さんに似てるんだ。

大好きな妹が友達作った時の、複雑というか悩ましいような……そんな微妙な感じに。

当時は琥珀姉さんの執拗なスキンシップが原因で、翡翠姉さんとうまく行ってなかった。確かパパは……。

「嫉妬してるんですか？」

あの時のパパが苦笑混じりに放った言葉を口に出してみると、今度はお姉さんが固まる番だった。

やっぱり。この人の琥珀姉さんと同じタイプ（シスコン）なんだ。

妹の事が可愛すぎて、そのあまり心配して突拍子のない行動を取ったりする。そう思うと、何だか微笑ましく思えてくる。

「な、何かしら？」

「いえ、何でも」

よし、今度簪ちゃんにお姉さんの事聞いてみよう。

それで今日の事話したら……絶対驚くに違いない。

「待ってくれる？　私はまだ、あなたの言った事を信じたわけじゃないの」

どこか厳しい目で私を睨むお姉さん。

まぁ、確かにこれまでの積み重ねはゼロなわけだし、私が何か言ったってそれを素直に聞き入れるかは別問題なんだけど。

でもあんまりここで騒がしくしたりすると、そっちにとってもあまりよろしくない事に……あ。

「1つだけ言っておくわ。もしもあなたがあの子に危害を加えるような事をした時は……」

その瞬間、一際強い殺気が放たれた。

あ、ヤバイって。今のはよろしくない。……うわー、珍しく怒ってるよ。

「潰すわ」

「……何を、潰すの？」

それほど大きくはないその声が廊下に響き、お姉さんは凍り付いた。

錆び付いたかのようにギギギと首を後ろへと向けて……さらに凍った。

静かな、されども確かなる怒りを宿した簪ちゃんの表情を目の当たりにしたから。

「か、簪ちゃん！？」

「……瑠璃に何してるの、お姉ちゃん」

冷たい目の簪ちゃんを目の当たりにし、これまでの威厳が嘘のように狼狽えるお姉さん。

いや、これ私の所為じゃないですよ？　こんなところで殺気出したのお姉さんだし、近くに簪ちゃんがいるのにそんな事すれば、まず気づくでしょ。

「ち、違うのよ簪ちゃん。これはね、その……」

何とか取り繕おうとするお姉さんだけど、簪ちゃんの前ではうまく言葉が出てこないらしい。

どんな経緯があろうと、私に殺気出したのは事実だし、脅迫とも思える物騒な言葉を言い放ったのも事実。

しどろもどろなお姉さんを見て、さらに怒りが大きくなって来たらしく、簪ちゃんの後ろに夜叉が見える。これってもしかしてス〇ンド？

「そ、そう！　悪いのは私じゃないわ。運が悪かったのよ！」

ブチッ……。

あまりにも空回りし過ぎた言い訳に、何かが千切れた音がした。

「お姉ちゃんのバカ！　大っ嫌い！！」

――――そして、全てが凍り付いた。

話せない部分は抜いて、瑠璃から聞いたあらすじを説明すると……
…2人は呆れていた。

いや、言い訳っぽくなっちゃうけど、さすがの瑠璃も「この世の終わり」のごとく落ち込んだ彼女が不憫に思ったのか、きちんとフォローは入れていたよ?

「お姉さんがちょっかい出して来たのは、簪ちゃんが心配だったから」と。

「……それで、どうなったんですか?」

「あのままなんだろうね」

今尚もしくしくと負のオーラをまき散らしている会長を、視線で指し示す。

僕もそりゃあ昔色々あったから、家族を心配する気持ちは分からなくもない。

……ま、とりあえずこの分だと、あの子の怒りが収まるまでしばらくかかりそうだね。

「……ねぇ、ネギ。本気であの子に“蒼い雫（ブルー・ティアーズ）”を渡すつもり？」

そう、甥っ子に問いかける。

「ええ。現時点でＢＴ兵器の適正値が１番高いのは彼女ですから」

「そりゃそうなんだけど……」

実力はある。それは私も認めざるを得ない。けど……。

「……確かにセシリアさんの性格に問題があるのは事実です」

「分かってるじゃない」

「ぶっちゃけると、英国貴族な彼女の無駄に高いプライドの所為で何度も問題が起きていますし」

あんた、ぶっちゃけ過ぎでしょ。

まぁ確かに、それさえ無ければいい子なんだけどね。その所為で不用意に敵を作って、それで翡翠や他の子が苦労してるんだけど。

あの子が専用機を手に入れて、それでＩＳ学園に行ったとする。そうしたら、どうなる？

「絶対無駄にトラブル起こすでしょうね。特に、例の……オリムライチカさんでしたっけ？　その人相手にくってかかるとか」

「そうそう。それで正論で反論されて「決闘ですわ！」って……」

「「……」」

……どうしよう、リアルに想像出来る。

「でも、セシリアさんの行動もある意味正しいんですよ。そうやって目立って、実力を誇示すれば、それが他国への牽制にもなりますから」

「そりゃあね」

候補生の実力と技術力の誇示。

それがうまく行けば、イギリスではこれだけ開発が進んでますよ～ってアピールにもなる。それ自体は私だって止めやしない。

ただあの子の場合、絶対にやり過ぎるって想像出来る。それで決闘騒ぎになってでもみなさいよ。

「……何とかならない？」

「無理です。それにセシリアさんが“蒼き雫”を使う事は政府の決定なんです」

母さんも反対したんですけど、とネギがボヤく。

まぁ、姉さんも頭抱えてそうよね。なまじ付き合いがあるだけに、どんな人間かも分かってて、そこから問題起こすって分かるから。

セシリア・オルコットが専用機を受領する理由としては、やはりＢＴ兵器の適正値が現在登録されている操縦者の中で歴代トップだから（私？　あんなチマチマしたの無理）。

開発者であるネギとしても、やっぱり出来る限り優秀な操縦者に扱って欲しいというのが本音だろうし。

「……そう言えば、ＩＳ学園には玖楼さんもいるんでしたよね？」

悪くなりかけていた空気を払拭しようと、ネギが話題を変える。

ああ、そう言えば何日か前にメール来てたっけ。ＩＳ学園の理事長に頼まれて、教職に復帰する事になったとかどうとか。

瑠璃ちゃんもＩＳ学園に入るとか言ってたけど……。

「……衝突、しないといいですね」

……ネギ、それフラグっぽいからやめて。

第3話：フラグは建つ時に建つ（後書き）

ネギ君とアスナ、登場です。
２人がどんな立ち位置にいるのかは、また今後詳しく説明されるかと。

第４話：少女達の来訪

神崎玖楼（旧名：高橋九郎）の生い立ちは、必ずしも恵まれていたとは言えない。寧ろ、不幸だったと言えるだろう。

高橋家は両親、父の祖父母、兄、姉、彼、弟２人、妹で構築されていた。

中小企業を経営しているだけあって、そこそこ経済力には恵まれていたが、家庭環境を例えるならば地獄だった。

児童虐待。

父親から執拗な暴力を受け、母親は家庭環境を嘆くのみ。人一倍優秀な兄は弟や妹達を蔑み、祖父母は見て見ぬ振り。

九郎はその中で、幼い弟達の防波堤となり、暴力の受け皿となる日々を送っていた。

学校生活はごく普通。成績は上の下。交友関係はそこそこ……。家庭の事を差し引けばごく普通の少年に映っただろう。

しかし、彼には１つだけ誇るべきものがあった。……驚異的な身体能力である。

小柄な体格でありながら、彼の運動能力はズバ抜けて高かったのだ。小学生でありながら大人の記録を上回る能力を、大人達は羨望の目

で見つめた。

もしも違う道を歩んでいれば国際的なスポーツ選手に成長していたに違いない。

しかし、その事を「調子に乗っている」という理由で暴力はエスカレート。その幼い身体には消えない傷が1つずつ増えていった。

彼自身、自分に自信が持てない事、さらに大人達の視線が気になり、どうにも出来ない。

弟達を守る防波堤として日々を過ごし、学費はアルバイトで貯め、いつの間にか彼は高校生になっていた。

勉強は出来る方だったため、県内でも有数の進学校に入学する事に成功した。

大学に進もうとは思わない。せめて、弟達を養うだけの力が欲しい。

学校卒業と同時に就職を決意していた九郎だったが、ここで思わぬ出会いをする事となる。

「神崎瑪瑙じゃ！　最初に言うておく、妾はこの学園のトップを奪いに来た！！」

その発言にクラスの男子が歓声を上げる。女子は冷ややかに見つめて……と思ったら、うっとりとした表情で瑪瑙を見つめている。

が、その中で唯一九郎だけは呆然としていた。
なんだこれは。何が起こった。

「ふむ……なかなか好感触じゃの」

黒髪を優雅にかきあげ、席へと戻る瑪瑙。
傾国の美女……否、まだ年若い故に『傾国の美少女』とでも形容すればいいのだろうか。
黒絹のように一切混じり無しの黒い髪。白く透き通った肌に端麗な顔立ち。１００人中１００人間違いなく、美少女だと公言するであろう美貌の持ち主。
九郎自身、彼女は美しいと思った。男子達を虜にするだけのものはある。
だが、そこまで熱狂するほどの理由が分からない。……ぶっちゃけ、引く。

「む？　そなた……」

と、席へ戻る途中、男子の中で唯一冷静な九郎に視線を向ける。
これだけの美少女に注目されて、動揺しないはずがない。

これまでの人生において、ここまで緊張した出来事があっただろうか？　いや、ない。

そもそもここまでの美少女にお近づきになれた記憶すらない。

「……よし、決めたぞ」

何やら考えていたようだが、意を決して九郎の顔を両手で取り……。

「んっ！？」

一気に自分の顔へと引き寄せた。

ちょうど、顔と顔がくっつく形……もっと分かりやすく言うと、唇と唇がくっついている。

クラスが凍り付いた。この中で、今現在起きている事態を呑み込めている者がいるだろうか？

沈黙する中、くちゅくちゅと水音が響く。

一方的に瑪瑙の舌が九郎の口内を蹂躙している。

数秒後、人生初のキスから解放され、顔を真っ赤にした九郎が声を

出せぬまま、瑪瑙を見上げる。

……その一方的な蹂躙者は、何故か得意げな顔を浮かべている。

どうしよう、殴りたい。

「そなたを妾の嫁にする！　意義は認めんッ！！」

「「「「えええええええええええええええええええええええええええっ！？」」」」

神崎玖楼と神崎瑪瑙の運命は、この日始まったのだ。

入学式当日、嫌な夢を見た。

「神崎先生、顔色が良くないですけど……どうかしたんですか？」

「……いえ、少し夢見が悪くて」

体調を気遣ってくれる山田先生が天使に見えた。

……それにしても、嫌な夢だった。

いや、体験自体は良かったと思う。人生初のキスがあれだし、相手も申し分ない。

ただ……あの後が悲惨だった。クラス……否、学校一の美少女からキスされ、挙げ句の果てに「嫁宣言」。これでまず、男子の大半が敵に回り、しばらくの間村八分の扱いを受けた。

「神崎君も大変だねぇ」と深いのかどうなのか分からない先生の言葉が、今も心に残っている。もしかしたら、それが教職に就いたきっかけなのかもしれない。

「心配ないですよ。体調自体はいいですから」

「そうですか？　ならいいんですが」

……あまり昔の事は思い出したくない。

瑪瑙との出会いやらその後の事はともかく、『神崎玖楼』になるまでの出来事はほとんどロクな事がなかった。

ま、その辺りはどうでもいい。あの頃はほとんど振り切ってる。

「自分の事を心配するより、クラス挨拶大丈夫ですか？」

山田君は１組の副担任を務める事になっている。

例の織斑一夏君が在籍するクラスなので、これから先色々と大変な事になるのは目に見えている。

しかも、その初日とも言うべき今日。最初のＨＲだが、担任の織斑君はまだ緊急の会議から戻ってきていない。

時間が迫ってきてるため、この分だと彼女１人でやる羽目になりそうだ。

「大丈夫です。私だって先生なんですから！」

大きな胸を張る山田君。

……とはいえ、普段の彼女を知っている分に心配になってくる。

（……大丈夫かな）

（これは……想像以上に辛い）

分かってはいたが、周りは全員女子。当たり前だが男子は俺1人。

男性操縦者というのは物珍しいらしく、視線が俺に集中しているような気がしてならない。

……ハッキリ言って、すっごい気まずい。

「皆さん入学おめでとうございます。私は副担任の山田真耶です」

教壇に立っているのは、眼鏡をかけた緑髪の女性。

体格は小柄ながらも自己主張の激しい胸をしており、健全な男子で

ある俺としてはつい目が行ってしまう。

その人、山田先生が自己紹介するも、生徒達からの反応は薄い。

「あ、え……きょ、今日から皆さんはこのＩＳ学園の生徒です。この学校は全寮制。学校も放課後も一緒です」

少し戸惑いつつもそう進める。

そうなんだよな。まぁ、俺は自宅から通う事になってるんだが……いや、そうだろ。だってさすがに女子寮に男が入るわけにはいかないし。

「仲良く助け合って、楽しい３年間にしましょうね」

そう締めくくるが、やはり反応は薄い。

拍手の１つでもした方がいいのかもしれないが、やっぱり気まずいために下手に行動を取れない。

無反応具合に、山田先生が狼狽えている。……ヤバイ、この人可愛い。

そんな山田先生を尻目にチラッと、左窓際の席へと視線を向ける。

そこには６年前に別れた時とそう変わらない――色々と成長して

いる部分もあるが――――幼馴染の姿がある。
視線を向けているのに気づかれたが……ぷいっと無視される。

（俺、なんか嫌われるような事したっけ？）

「……ん、織斑君？」

「は、はいっ！？」

そう呼ばれ、思わず立ち上がる。

あ、そっか。自己紹介か。いつの間にか自己紹介になっていたのか。

「えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

……それで？

そんな空気がひしひしと伝わってきてしまい、思わず立ちすくむ。

いや、これ以上何を言えばいいんだよ。趣味か？　特技か？　経歴か？

（い、いかん……）

答えるチャンスを逃した事に気づき、詰まった。

このまま黙り込んだら、「暗い奴」のレッテルを貼られてしまう。

助けを求める相手……えと、箒！

が、やっぱりその幼馴染はこっちから視線をそらす。俺にどうしろって言うんだよ！

と、とにかく何でもいいから言葉にしなければ……！

「い、以上です！！」

その瞬間、俺以外の人間がズッコけた。

えっと、やっぱダメだった？

「当たり前だ、バカ者」

「あたっ！？」

さすがにマズかったかと思った瞬間、脳天目がけて硬い何かが叩き込まれた。

こ、この完膚無きまでに容赦のない一撃は……千冬姉か！

「学校では織斑先生と呼べ」

黒スーツでキリッと決めている千冬姉は、そう一瞥すると教壇に立つ。

「先生、会議は終わったんですか？」

「ああ。済まなかったな山田君。クラスへの挨拶を押しつける形になってしまって」

山田先生と交代する代わりで教壇に立つと、威厳に満ちた顔でクラス中を見渡し、言い放つ。

「諸君。私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物にするのが仕事だ」

その瞬間、クラス中から黄色い声が上がった。

いや、これはある意味仕方ない。

前にも話したが、千冬姉は現役を引退したとはいえ、今も尚多大な敬意を向けられている。千冬姉を目標にＩＳ業界に進路を取る人だっているくらいだ。

ちなみに現役時代、男性よりも女性にモテていたらしく、いつも家には女性からのファンレターやらプレゼントが届いており、辟易していた。

「毎年よくもこうバカ者ばかり集まるものだ。……まさかとは思うが、私のクラスにだけ集中させてるのか？」

こめかみを押さえつつ、千冬姉がそう呟く。

もしかしたらそうかもしれない。主に千冬姉に押しつける形で。

「……で、挨拶も満足に出来んのか、お前は」

とんとん、と出席簿を手で叩きながら、静かに千冬姉が問いかけてくる。

いや、その……こういう状況にはあまり慣れてなくて……すんません。

一夏が助けを求めるような視線を向けてきたので、思わず視線をそらす。

いや、私がフォローに入るわけにもいかんだろう。そもそもどうフォローしろと言うんだ、お前は。

心の中で「すまない」と謝った直後、一夏の受け狙いとしか思えない言葉に、思わず大きく体勢を崩す。

（……変わっていないな、一夏）

突如登場した千冬さんに叩かれ、頭を抱える一夏を見ながら、ふっとそう思う。

６年しか経っていない。

６年も経った。

時間の捉え方は人それぞれだろう。だが、人が変わるには充分すぎる時間だ。

私は……まぁ色々あった。いい事も悪い事も平等に。

別れもあれば出会いもあって、幸せであれば不幸でもある。……

千冬さんに言わせると私は「変わった」人間のようだ。

どうやら一夏はあれからあまり変わっていないらしい。

いい意味でも変わっていないし、悪い意味でも変わっていない。

それが何となくおかしくて、ふっと苦笑を溢した。

第5話：授業開始（前書き）

玖楼が主人公のはずなのに、何故かいない。

第5話：授業開始

ただのバカ。

とりあえず、織斑一夏はそーゆー認識でいいと思う。

（あんまり警戒する必要ないかな～）

織斑先生の出席簿が炸裂する光景を見つつ、そう思う。

いや、だって……参考書を『古い電話帳』と間違えて捨てたって、それ完全に自業自得でしょ？　フォローのしようがない。

「学校からの支給品を無くすとは何事だ」

「いや、千冬姉。俺は」

すぱぁんっ！！

……身内相手でも容赦が全く無いのは見習うべきかもしれない。

「学校では織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

最早、漫才にしか見えない。

まぁ姉弟漫才は放っておくとして、織斑一夏については特に警戒する必要が無いと分かったので、他の人を注意深く見てみる事にしよう。

次の警戒対象は彼の左斜め後ろに座る、金髪ロールの女の子。

イギリスの代表候補生、セシリア・オルコット。クラスメイトでは2番目に警戒すべき相手だ。

IS学園に在籍するイギリスの候補生の中で唯一、専用機を与えられている。

（確か、“蒼き雫（ブルー・ティアーズ）”だっけ？）

イギリスではBT兵器……俗に言うと「ファ○ネル」みたいな誘導兵器の開発が進んでいて、彼女の機体はそれの運用試作機だ。

何故私がそんなに詳しいのかと言うと、イギリスのIS開発チームの開発主任とは少し縁があるから。

弱冠10歳で開発主任となったネギ・スプリングフィールド少年。

ネギ君のお母さんとうちのパパママは古い友人で、その縁で私たち兄妹とも付き合いがある。

ネギ君も技術開発の一環で、うちのママと情報交換したりしてて、私にも情報が入ってくるってワケ。

（……うん、ファン○ルは私も欲しい）

ダメ元で今度頼んでみよう。

私だって言いたいの。「ゆけっ、フ○ンネル！」とか「行けよファ○グゥッ！！」って。

……おっと、話が反れてしまった。

（とにかく、私が１番警戒すべきなのは……）

窓際の席に座る、ポニーテールな女の子に視線を向ける。

篠ノ之箒さん。その珍しい名字から分かるかもしれないけど、ＩＳの開発者である篠ノ之束博士の実妹。

剣道の全国大会の優勝者らしいけど、私が注目してるのはそこだけじゃない。

実はこの子、パパの教え子なんだって。それも……。

（パパが大怪我した、３年前のあの事件の関係者）

３年前の事件について、私はあまり詳しく知らない。

家族でも詳細を知ってるのは、パパとママと１番上の紫水お兄ちゃんくらい。多分、ヒスコハ姉さん達も知らないと思う。

ただ、生徒を狙ってテロ紛いの事件が起きて、パパとお兄ちゃんがそれを解決するために奔走して、パパが大怪我してお兄ちゃんが仕事クビになったと。

……まぁ、お兄ちゃんは超が上に付くほどのお人好しだし、人助けで仕事クビになるのはいつもの事だからどうでもいいけど、パパはねぇ……。

「もうちょっと大人しくして欲しいんだけどねえ……」

「……ほぅ、何が大人しくして欲しいんだ？」

その声が響き、私は静かに顔を右へと向ける。

そこには出席簿を手に持った、夜叉の姿があった。

「神崎、単一仕様能力について答えろ」

「ＩＳが操縦者と最高の相性を発揮した時に発動する固有特殊能力の事です。例を挙げると、織斑先生が現役時代に乗っていた「暮桜」

の「零落白夜」があります。……ところで、見逃してもらえます？」

「無理だな」

「……ですよねー」

すぱぁんっ！！

ＩＳ学園の屋上にて、私はある人物と隣り合っていた。

織斑一夏は私にとって幼馴染であり、幼少期から付き合いのある数少ない友人だ。

「……久しぶりだな、箒」

「ああ」

……5年、いやもう6年になるか。

色々あって、私たち家族が引っ越す事になってしまい、一夏や千冬さんとも別れざるを得なくなった。

それからは政府の保護を受けながら、各地を転々とする日々。時に執拗な尋問も行われ、私は疲弊していった。

全ての元凶とも言える姉さんを憎んだ事もあった。

姉さんがＩＳなんてものを作らなければ、公表しなければ、こんな目に遭う事も無かったのにと。

……尤も、私たちに姉さんを責める権利など無いのだが。

「そう言えば、剣道の大会で優勝したんだってな。おめでとう」

「ん？　ああ。よく知っているな」

「そりゃあ、俺だってニュースや新聞くらい見るし」

そうなのか？

少なくとも私の知っているお前は、アニメやバラエティー番組しか見なかっただろう。新聞もテレビ欄と4コマ漫画だけで……。

「おいおい、何年前の話してるんだよ」

「……それもそうか」

6年も経てば、趣味嗜好も変わる。

私も……昔は受け入れられなかった事も、今は割合受け入れられるようになった。

「あぁ、それと」

「なんだ?」

「改めて久しぶり。……6年ぶりだけど、すぐ箒だって分かったぞ」

ほう。

鈍い一夏にしては、意外な言葉だ。

「同じ髪型だしな」

そこだけか。

確かに髪型は6年間変えていない。

今更短くするのも嫌だったし、髪型を変える気にもならなかった。

「……ありがとう」

「え？」

「いや、何でも無い」

呆ける一夏に背を向け、歩き始める。

鈍感なままの一夏が好きだった。

バカみたいに真っ直ぐな一夏が好きだった。

お前を好きになって、お前が初恋で良かった。

（……さよなら）

私の、初恋。

6年間、停滞していた時間が動き出した。

「ちょっとよろしくて？」

休み時間、そんな声が聞こえ、すっと視線をそちらに向ける。

見ると、織斑君がセシリア・オルコットに絡まれていた。

「わたくしを知らないっ！？　このセシリア・オルコットを……代表候補生にして、入試主席のこのわたくしをっ！」

ああ、やっぱりそっち方面でちょっかい出しに行ったんだ。

それにしても、代表候補生はともかくとして、別に入試の成績なんて開示されてるわけでもないし、さっきの自己紹介を聞き逃してた

ら名前だって分かんないと思うし。
まったく、どんだけ自意識過剰なんだか。

「なんですって!?」

「……へ？」

いつの間にか、そんなオルコットさんに向けられていた視線が私へと向けられていた。
あれ？　何でこういう流れになってるわけ？
と、なんだか申し訳無さそうな顔で織斑君が呟く。

「……あのさ、全部声に出てたぞ」

え、それ本当？
まぁ、別に聞かれても困る事じゃないし、その辺りは問題ないんだけど。
そう口にすると、オルコットさんはさらに顔を赤くして睨み付けて来る。……あー、仕方ないな。

「だって、入試の成績って開示されてるわけでも無いし。それに国家代表ならともかく、余所の国の一候補生がわざわざ報道されたりする？」

そりゃあ、国家代表ならモンド・グロッソだけでなく、名だたる大会や競技にも出場しているわけだから、テレビでも結構目にする事もある。

でも、所詮は代表候補生。せいぜい雑誌のインタビュー記事で目にする程度。そりゃあ群を抜いて優秀ならともかく、何人もいる内の1人がわざわざテレビに出るわけもない。

入試の成績にしても、学園側がわざわざ全体に対して開示するわけでもない。せいぜい、当人に「〇人中〇位でした」くらいじゃないの？　私も実際そうだったし。

周囲の子も私の言葉に納得しつつ「確かにそうよね」とひそひそし合っている。

「と、とにかく、　わたくしはエリートなのですわ！　本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運ですのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか、ラッキーなのか」

「ば、バカにしているんですの？」

いや、きっと無自覚なんだと思う。

世の中には致命的に空気の読めない人がいる。私が見た感じ、こっちの彼もそんな1人っぽいから。

で、そんな相手に下手に突っかかるとのれんに腕押し。空回りして……こうなる。

最初は興味ありげに見守っていた子達も、次第に「イタイもの」を見るような視線へと変わってきている。

「……ま、まぁ分からない事があれば、泣いて頼めばまぁ教えて差し上げてもよろしくてよ。わたくし、なんといっても入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

そんな視線に晒されつつも、元の勢いを失わないところは素直に凄いと思う。

「俺も倒したぞ、教官」

そんなオルコットさんも、織斑君の言葉に凍り付いた。

これには驚いた。入試の教官と言えば、ＩＳ学園の教師が担当するわけで、そんな教官を初心者の彼が倒した……？

「た、倒した……？　あなたが、教官を？」

「ああ。……ってか、突っ込んできたのを避けたら、壁にぶつかって動かなくなったんだが」

……それ、勝ったって言わない。

「きょ、教官を倒したのは、わたくしだけと聞いていましたが……？」

「『女子だけでは』ってオチじゃないのか？」

あ、確かにそうかも。他の子もうんうんって頷いてるし。

もしくは男性操縦者の出現で情報自体が混乱してて、そーゆー結果がうまく伝わって無かったとか。

「あなたはどうなんですの！？」

「へ、私？」

いきなり話を振られて、少し戸惑う。

「私は……負けたけど」

「そ、そうですか」

時間一杯持ち堪えたけど、判定負け。

勝つ気で行ったんだけど……やっぱり世界最強の名は伊達じゃなかった。

現役引退して3年近く経つけど、あれのどこが引退組なんだか分からないな、織斑先生。

見た感じカスタムとか何もしてない打鉄で、どうやったらあんな動きが出来るのか分かんないし。

「……千冬姉と、戦ったのか？」

「うん」

……あれ？　なんでみんな凍ってるわけ？

「織斑先生と戦って、制限時間持ち堪えた？」

「いや、持ち堪えたけど判定負けだったって」

射撃制度とか残量ＳＥとか攻撃頻度とか……。

そういう観点から総合的に判断して、それで判定負け。

……そういえば、試験後の織斑先生、どこか生き生きとしてたような……。

「……納得いきませんわ」

「いや、そんな事言われたって」

「納得いきませんわ！！」

織斑君が教官倒して（向こうの自滅だけど）、私が織斑先生から判定負け喰らったのは事実だし。

そんな事言われたって……私が困る。

その後すぐに休み時間が終わり、不完全燃焼なオルコットさんは敵意を隠さないまま席へと戻ったのであった。

……いや、これどんなとばっちり？

番外編：ＩＦのお話２本立て（前書き）

突発的に思いついた話を書いてみました。

番外編：IFのお話2本立て

IFその？：もしも、玖楼があの姉妹の父親だったら……？

「2人に、会わなくていいんですか？」

「……今更、何を言えって言うんです」

轡木さんの言葉に、僕はそう返す。

本当に今更だ。今更それを明かしたところで、何も変わらない。

経緯はどうあれ、僕があの2人を捨てた事は事実なのだから。

「彼女が逝って間もなく、あなたは更識家を離れた。あの2人を守るためでしょう？」

「……」

……元々、僕と彼女の婚姻は更識家には歓迎されていなかった。

子供が生まれて少しは緩和されたとは言っても、大元のところでは変わらず、簪が生まれてすぐに彼女は逝った。

このまま僕がいたとしても、それはあの子達にとってはマイナスに

しかならない。

だから、信頼出来る相手に子供達の事を頼み、更識家から離れた。

更識家を離れて、無我夢中に仕事に打ち込み、心は荒んでいった。

そんな僕を救ったのは、瑪瑙と瑠璃だった。

あの闇の中にいた僕に手を差し伸べてくれた。迷いも恐れもなく、ただ一緒に歩こうと。

……まさか、瑠璃の友達として簪がうちに来るとは思って無かったけど。

「とにかく、教職の話はお受けしますが、2人の事に関して、僕から何かを話すつもりはありません」

「……わかりました」

「……ねえ、簪ちゃん。あなたのお姉ちゃん、何とかならない？」

「ごめん無理」

友人の言葉にそう応える。

だって……無理だから。

「何であんなにパパにベッタリしてるの？　おまけにパパもまんざらじゃなさそうだし！？」

ファザコン度合いが日に日に強くなっていく瑠璃に、苦笑するしかない。

……確かに、お姉ちゃんがあんな風に男の人に甘えたりするのは珍しい。

人にちょっかい出したり、からかったりするのが趣味みたいな物だけど、神崎先生の前に出るとすごく大人しくなる。

「……瑠璃に、似てる？」

「はぁ？　私と楯無さんが？」

「もちろん行動自体は似てないけど……」

何となく、神崎先生と接してる時の瑠璃に気配が似てるって言うか……。

自分でもよく分からないけど、神崎先生の事は嫌いじゃない。むしろ好感が持てる。

理由を説明しろって言われても、何て言えばいいのか分からないけど……。

ＩＦその？：もしも玖楼がＩＳを動かせる男性だったら……？

「……」

やりづらい。その一言に尽きる。

その原因は、今もにこにことしている生徒の１人。

思春期の生徒の中に混じっても、まったく違和感がないのが恐ろしい。

（どうしてこうなった）

神崎先生にＩＳ適性があると分かったのは半年ほど前。

私も詳しく知らないが、たまたま街でひったくりに遭遇し、それを追いかけたところ搬入されるはずだったＩＳが保管されている場所に迷い込み、たまたまそれを触ったところ起動したという、何とも偶発的な要因からだ。

一時は束が関与している可能性（あれは神崎先生に懐いていた）も考えたが、ここまで偶然が重なる事から考えにくい。

……まぁ、ＩＳを動かせるのは一夏と合わせて２人だけなのだから、それを保護しようとするのは分かる。分かるのだが……。

（よりによって何故生徒なんだ！　しかも何故私のクラスに……！）

この辺りに悪意を感じるのは私だけだろうか？

神崎先生も「まぁ、仕方ないよね」と、今の状況を受け入れている。

……違和感が無いのが恐ろしい。

なお、自己紹介でもしっかり「神崎玖楼、これでも４３歳だけどよろしくね～」と言っていたが、クラスの大半が「１３歳の年下」だと誤認している（あれで４３歳は反則だ）。

「織斑先生、どうしたんですか？」

「……いや、何でも無い」

「ねーねー、ＩＳ装着しなきゃダメ？」

「ダメです」

つい先ほど、届けられた専用機を装着した玖楼が、鬱陶しげにそう尋ねる。

千冬はそれを一言で切って捨てる。……一応これはＩＳの試合なのだ。装着しなきゃ勝負にならない。

「いや、だって僕こんなの無くても戦えるし……」

それは分かっている。嫌と言うほど分かっている。

千冬自身、学生時代に何度も目の前の相手に叩きのめされている。素手で岩盤を砕き、その蹴りは鋼鉄をも破壊する。空を飛べると言っても驚かない。それが神崎玖楼のクオリティだ。

……正直言って、生身でＩＳに勝っても驚かない。寧ろ勝てるに違いない。

だが、それで勝ったら間違いなくセシリアにトラウマが残る。色々と問題になるのも目に見えている。

「お願いですから、ＩＳで戦ってください」

「……まぁ、仕方ないか」

ＩＳは寧ろ拘束具だ。玖楼の力をセーブするための拘束具と見ていい。

嫌がりつつも、ガチャンガチャンとアリーナへと向かっていく。

「じゃあ、行ってきまーす」

そう言うと、飛び立っていった。

残されたのは何とも言えない顔をしている千冬と、何を言っていいか分からない真耶の2人だけ。

「あの、織斑先生？」

「……3分だな」

「え？」

「3分保てばいい方だ」

その言葉で真耶は理解した。

千冬の話から、玖楼が強い事は理解出来る。

それでもＩＳに関しては素人。稼働時間では代表候補生のセシリアには遠く及ばない。

玖楼が3分保てばいい方だと、そう言っているのだと……。

「オルコットが」

「そっちがですか！？」

なお、戦闘時間は1分にも満たず、玖楼が圧勝したとだけ言っておこう。

番外編：ＩＦのお話2本立て（後書き）

ＩＦその？の背景設定

まず、玖楼は更識楯無（１６代目）と出会い、周囲の反対を押し切って結婚。子供にも恵まれるが、簪が生まれて間もなく楯無（１６代目）が死亡してしまう。
その後、自分がいれば子供達への風当たりが余計に酷くなると考え、信頼出来る相手（布仏家の人間、虚と本音の親辺り）に子供達の事を頼み、姿を消す。

玖楼は仕事（主に裏の人間として）に打ち込み、身も心も磨り減らしていたが、そんな中である研究施設から2人の子供を保護する。
それが瑪瑙と瑠璃。紆余曲折の末、２人を引き取る事に。

楯無（１７代目）も簪も父親の事を知らずに育つけども、いつしか「会いたい」と思うように。
一方で簪は瑠璃と知り合い、さらに父とは知らずに玖楼とも出会う。

玖楼がＩＳ学園に赴任してから、楯無も玖楼と遭遇するわけだが、彼を父親とは気づかずに好意を抱き始める。
全てが発覚するのは学園祭の頃。たまたま轡木と玖楼の話を聞いてしまい……という流れ。
好きになったのは実の父親で、と苦悩する楯無。一方の簪もそんな姉の姿を見て、真実に気づき始めて……。

……いえ、やりませんよ？

第6話：舌戦

「同室の篠ノ之ほう……なんだ、一夏か」

そんな箒に、俺は固まった。

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！　山田先生に寮暮らしだと言われ１０２５号室に入ったら、部屋の奥から風呂にでも入っていたのかバスタオル姿の箒が現れたんだ。

何を言ってるのかわからねーとは思うが、俺も何をされたのか分からなかった。

同室だとか同衾とかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

「なんでそんな格好なんだ！！」

混乱する頭でそれだけ言えた俺は偉いと思う。

「いや、これは今までシャワーを浴びていたからで」

「そうじゃない！　早く服を着ろ！」

「……それもそうだな」

何だか妙にマイペース過ぎる箒に、さらに混乱が酷くなる。

てかお前、そんな性格だったか!?　俺の知ってる箒だったら、竹刀で斬り掛かってきてもおかしくないぞ!?

「……って!　何でここで着替えようとするんだ!?」

と、男の前であるにも関わらずバスタオルをはだけようとする箒を制止する。

「何でって……着替えろと言ったのはお前だろう」

「俺がいるだろ!?　ちょっと待ってろ!　部屋出るから!」

「慌ただしい奴だな。少しは落ち着いたらどうだ。……私のように」

誰の所為でそうなってると思うんだ!!

箒がバスタオルを外す前に、慌てて部屋から転げ出た。

……放課後なのに、学校にいるより疲れた気がする。

「……変わりすぎだろ」

そりゃあ6年経ってるから、人間変わるところの1つや2つあってもおかしくない。

実際、箒もあの頃とは違って、かなりワガママな身体に……じゃなかった、色々と成長してるのも事実だ。

でも！　あれは変わりすぎだろ！？

「あれ？　ここ織斑君の部屋？」

「遊びに入っちゃおうかな～」

「でも、何だか疲れてるみたい～？」

「あ、いや。これは……」

俺たちの声を聞きつけたのか、女子がわらわらと集まってくる。

しかも、寮だからか全員が部屋着に着替えており、その誰もが下着に近い格好だ。

目の保養と言えば聞こえはいいが、正直目の毒過ぎる！！

「どうした、騒がしいが……」

と、後ろの扉が少し空いて、箒が顔を出す。

着替え終わったのかと思い振り向いて……噴いた。

箒は着替えるどころか、バスタオルすら巻いていない。ぶっちゃけ全裸だ。扉で隠れてるとはいえ、どうやっても隠しきれないものが……。

「きゃーっ！　篠ノ之さん、だいたーん！」

「む、そうか？」

あ、頭が痛くなってきた……。

とりあえず頭痛の原因に物申す事にしよう。

「何で着替えてないんだよ！」

「いや、着替えようとしたら外が騒がしくてな。それで何かと思い、こうして様子を見に来たのだが……」

「いいからさっさと着替えろ！」

無理矢理箒を部屋の中へ押しやって、扉を閉める。

……どうしてこうなった。

「騒々しいぞ、何の騒ぎだ！」

騒ぎを聞きつけたのか、黒スーツ姿の千冬姉がやってきた。

威圧感の溢れる姿だが、俺にとってしてみれば頼れる事この上ない。

「千冬姉……」

「学校では織斑先生と……どうした」

「色々、あって」

それだけで理解してくれたらしく、「そうか」と短く答えてくれた。

少しして、「付いてこい」と言われたので付いていき、廊下の影に入り、千冬姉が口を開いた。

「何があったかはだいたい分かる。篠ノ之の事だな？」

「ああ。……何で裸見られたのにマイペースなんだよ！？　等に何があったんだよ！？」

「私にも分からん。恐ろしく穏やかな気配がしていたが、そこまでとは」

どうやら千冬姉にも原因は分からないらしく、少し戸惑っているようだ。

俺が知ってる箒だったら、普通に竹刀取り出すか、手が出るはずだろ!?　何でのほほんとしてるんだよ!?

「てか、何で俺女子と同室なんだ？　普通個室だろ」

「それはすまん。こちらで少し手違いがあったらしくてな……しかし、山田君から何も聞いていないのか？」

「『寮で生活して貰います』って、鍵だけ渡された」

そう言うと、千冬姉は頭を抱え出した。

……つまり、山田先生が手違い云々を俺に伝え損ねて、あんな事になったと？

あの人、やっぱりそういうキャラなのか。入試の時もいきなり突っ込んできて自滅してたが……。

「引っ越しとか、どうにかならないのか？」

「今言ったが、手違いで寮部屋が全て埋まってしまっている。個室の人間を篠ノ之の部屋に移すにしても、手続きで少し時間がかかる」

「……つまり、しばらくは箒の部屋で暮らせ、と？」

「そうなるな」

顔を見合わせて、ため息を吐いた。

……これ、最悪野宿する事も考えた方がいいかもしれない。

「……やっぱダメだね、大分鈍ってる」

ぽきぽきと間接を鳴らしながら、柔軟する玖楼。

その様子を「信じられない」と言わんばかりの顔で見つめる人物が1人……。

「正直、自信無くしそうです……」

たった今まで、玖楼の相手をしていた真耶であった。

仕事が終わり、部屋に戻ろうとしていた彼女を千冬が引き留め、アリーナに連れてきたのだが、なんと玖楼の相手をしろという。

何でも鈍った勘を取り戻したいからだそうだが、しかも生身ではなくＩＳで戦えと。

当然、真耶は断った。生身の相手にＩＳで戦うなど、どうかしている。

だが……。

『心配はいらん。この人はそれくらいでやられるほど柔な人じゃあない。私が保障する』

と、千冬が豪語した事もあり、真耶も彼女にそこまで太鼓判を押される玖楼の実力に興味が湧き、軽く戦ってみたのだが……。

近接戦闘を挑んでも、逆にブレードを叩き折られる始末。

千冬に「ライフルも使え」と催促され、嫌々ながらも射撃兵装も使用したが、かすりもしない。

人間ではありえないほどの反応速度と身体能力。さらに蹴り一発でＳＥが大幅に削られる。

最終的に強烈な蹴りを数発受け、ＳＥが底を尽きた。

「すまなかったな、山田君。嫌な役割を押しつけた」

「……織斑先生」

本当に申し訳無さそうな顔をしつつ、ぽんと真耶の肩に千冬は手を置く。

「神崎先生は……ハッキリ言って規格外だ。常識人だが、実力に関しては私たちの想像の遥か斜め上を行く。非常識極まりない方だ」

「本当に人間なんですか、あの人！？」

「……多分」

明後日の方向を向き、自信なさそうな声でそう答える千冬。

正直なところ、玖楼が人間だと自信を持って言えない。

素手で岩盤を撃ち抜くわ、回し蹴りは鋼鉄をも砕くわ、ただの一跳びで１０ｍ近くは跳躍するわ……。

サイボーグや地球外生命体だと言い出しても不思議じゃない。それくらい超常的なのだ。

（思えば、ご友人も大概だったな）

玖楼の交友関係もそれなりに広い。

中でも、「気合」の一言で何でもやってのける筋肉チートには、千冬も渋い顔になった。

あれは間違いなくバグだ。生けるバグキャラと言っていい。

「とにかく、神崎先生に常識を求めるのはやめた方がいい。あの人自身、常識から半分乗り出してるような人だ」

織斑先生も大概だと思いますよ？

真耶はそう思ったが、言ったら言ったで自分がくびられると分かっていたため、口にはしなかった。

教師になって日は浅いとは言え、それなりに空気を読むことくらいは出来るのだ。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

壇上でそう言うのは織斑先生。

これまでの授業は山田先生が教壇に立っていたのだけど、よく見れば山田先生はなにやらノートを持って後ろに控えている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス対抗戦？　代表？

言葉通りの意味と受け取ってもいいのかな？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

あ～、なるほど。

要するにクラスの花型みたいな感じだね。基本的に1番強い人がやる事になるかな。

私は別にそーゆーの興味無いけど……まぁ、最強って言ったら私かな。

「はいっ、織斑君を推薦します！」

クラスメイトの1人が手を上げ、そう推薦する。

……言うと思った。当の織斑一夏も顔を引き攣らせてる辺り、嫌な予感はしてたらしい。

「では候補者は織斑一夏。……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

そう言ってクラスを見渡す織斑先生。

と、そこで当の本人が手を上げ、質問する。

「あの……一応聞きますけど、辞退とかは」

「出来るはず無いだろう」

「……ですよねー」

がっくり、と肩を落とす織斑一夏。

ま、まぁ……これは気の毒としか言い様が無い。

そんなこんなで代表が決まりかけたその時、勢いよく1人が立ち上がった。

「待ってくださいっ！　納得がいきませんわっ！」

そんな甲高い声が教室に響き渡る。

……ああ、昨日の絡み具合から想像してたけど、やっぱり絡んできたか、セシリア・オルコット。

「そのような選出は認められませんっ！！　大体、男がクラス代表だなんていい恥曝しですっ！　このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえとおっしゃるのですかっ！？」

いや、そこまで否定しなくてもいいと思うけど。

「実力から行けば、私がクラス代表になるのは当然。それを物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困りますっ！　私はこのような島国までＩＳ技術の修練に来たのであってサーカスをする気は毛頭ございませんわっ！」

極東の猿、という単語が出た瞬間、クラス中の視線が厳しいそれになる。

穏和な山田先生ですらいい顔をしておらず、織斑先生に至っては無表情なのが怖い。

しかも、当のオルコットさんはそれに気がついていない。気づかず、そのままさらに口調が激しくなっていく。

「いいですかっ！？　クラス代表とは実力トップがなるべき、そし

てそれは私ですわっ！」

本当に実力がトップなのかどうかは怪しいところがあるけど。

あー、それにしてもかなりイライラしてきたかも。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては苦痛……」

「いい加減にしなさいよ、この味覚馬鹿」

さすがに苛立ちが抑えられなかったので、そう言って立ち上がる。

オルコットさんの視線が厳しいが、そんなの知った事か。

「……今、何と仰いましたの？」

「味覚馬鹿って言ったのよ、英国人（ブリティッシュ）」

イギリスの料理はマズイ。その上、紅茶にいつもミルクを入れるのはどうなの？

確かにネギ君はイギリス人で友達だけど、その一点だけはどうしても譲れない。

ミルクティー。何でもかんでもミルクティー。……まぁ、私は圧倒的に珈琲党だけど。

「あら、よくもそんな泥水を何度も飲めるものですわね」

「ミルクティーよりはいいと思うけど？　……もちろん、私も紅茶は飲むわ。レモンティーをアイスでだけど」

「レモン？　アイス？　冗談でしょう？　レモンは紅茶の風味を壊しますわ。あなた、舌は大丈夫ですの？」

「……驚いたわね。味覚馬鹿の英国人に舌の心配をされるだなんて。逆に聞かせてもらうけど、頭大丈夫？」

どうやら、私の言葉は完全にオルコットさんの怒りに触れたらしい。ビシッと人差し指をこちらへと向けて、言い放つ。

「決闘ですわ！！」

「……いいよ。四の五の言ってるよりずっと分かりやすい」

そんな私たちのにらみ合いは約１０秒後、織斑先生の出席簿アタックで中断されるのであった。

そうして決まったのが、いつの間にか蚊帳の外にいた織斑一夏も加

え、1対1のローテーションを組み、成績の良かった者がクラス代表。

もし同成績に終われば、私たち以外から代表を選出する。

……とりあえず、私が天に立つ！

第6話：舌戦（後書き）

会話の内容に聞き覚えのある方もいらっしゃるかもです。
瑠璃の好みはどちらかと言うと、フェイト寄りです。

そして、「生けるバグキャラ」……存在してます。

お知らせ

まぁ、このタイトルで嫌な予感がしてる人も中にはいるかもしれませんね。

まさしくその通りです。

案の定ですが、「御狐様のＩＳ日和」を更新停止させていただきます。

理由としましては、現在投稿中の「とある兄妹の連続転生物語～憑依編～」と似通った内容になるかもしれないというところと、勢いだけで書いてしまったためどうしても無理が出てきてしまうというところがあります。

それにある程度物語が固まっている「なのは」や「ネギま」と違って、ＩＳはまだ中盤（？）までしか原作が進んでいませんし、私の貧困な想像力では限界があったのも事実。

更新を楽しみにしている皆さんには申し訳ありませんが、更新を停止させていただきたいと思います。

削除はしない……というより、削除すると後が怖いのでしばらくは

そのままにしておきます。

……もしかしたら、神崎夫婦物でまた別の話を出すかもしれませんが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7293y/

御狐様のIS日和

2012年1月10日03時46分発行